



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

「ごんご」 「ありがとう」 は魔法の言葉

京都市立正親小学校 六年 片岡^{かたおか} 斗真^{とうま}

幼いころの記憶が今もほんの少し残っています。それは、お父さんと車に乗っていた時のことです。ぼくはお父さんの運転する車の助手席に座り、二人で出かけていました。車がギリギリすれちがうことができるくらい細い道に差しかかったときのことです。向かいから来た高級車が、お父さんの車に向かってライトを光らせ、大きな音でクラクションを鳴らし、お父さんに、「バックしろ。下がれ。」と言っているように圧してきました。お父さんは、道が少し広くなったところで静かにバックをして道をゆすり、相手の車を通しました。相手の車はすれちがいに、窓を開け、お父さんに向かって「最初から早く下がれ。」ときつく大きな声で怒鳴って、去っていきました。二十代前半の、お父さんよりも若く、となりに女性を乗せ、お父さんに勝ったかのような笑みをつかべていたように記憶しています。あまりのしょうげきで、ぼくは泣きそうでした。ごんご、見なかつたふりをしたような気がします。怒鳴られ、悔しかったと思いますが、心の中で「ごんご」と道をゆすったお父さんは、ぼくは格好良かったと思っています。もちろん、勝ち負けではないけれど、本当に勝ったのは、何も言い返さず、もめ事を起さず、「ごんご。」と道をゆすったお父さんだっただけではないでしょうか。

そんなことを思い出しながら自分をふり返ると、残念な低学年時代の自分が思い出されます。負けずぎらいとは、スポーツ選手などにはとても良い言葉ですが、ぼくはその負けずぎらいがゆえに、低学年のころ、毎日のように友達ともめ事を起こしていました。それもとてもしないことではなかっていました。休み時間に遊ぶ中でのボールの取り合い、勝ち負けのけんか、ルールを守らなかつ

たなどの言い合いでもめていました。すべて、自分が正しく、相手が間違って悪いというような言い方で、お父さんのようにがまんしたり、ゆすったりすることがありませんでした。自分が正しい、自分が正解、自分しか見えていなかったのだと思います。

六年生になり、今では自分が悪かったことをふり返れるようになりました。くだらないもめ事やけんかで時が過ぎていく毎日は、人生のそんなをしていると思えるようにもなりました。もめる前に、友達にゆすったり許したりできるようになってきました。これはぼくだけでなく、クラスの友達も、相手のことを思い、やさしく接してくれていると思います。だから、またぼくも「ありがとう」が素直に言えるようになってきました。

今世界では、平和な国ばかりではなく、戦争が起こり、悲しい状況の国もあります。自分が正しいと、自分の考えだけを押し通し、自分の正義だけで相手を攻め、武力で相手を押さえつけようとしているのです。相手のことを思い、ゆすることができず、まるで、「最初から早く下がれ。」と怒鳴られたあの時の状況と同じではないかと思えます。戦争にはもっと深い歴史的な事情があるかもしれませんが、人間同士がすることなので、「ごんご。」とゆすり、「ありがとう。」と感謝することが平和に過ごすための方法なのではないでしょうか。

社会を明るくするためには、相手を思い、ゆすり、許し、感謝の気持ち伝える、こんな小さな行動一つ一つが大事なのだと思えます。

「ごんご。」 「ありがとう。」 は魔法の言葉。誰もが使える魔法です。そんな魔法で明るい社会にしていきたいです。



京都府推進委員会委員長（京都府知事） 賞

自分を大切に

京都市立錦林小学校

六年

竹村 たけむら

柑南 かんな

「社会を明るくする運動」。その言葉を初めて聞いた時は、どうい
う意味なのかよく分からなかった。だから、この題の意味を知った
時は、少し驚いた。更生とか、非行防止のこととかを書くんだと。
母親に相談してみると、「難しいテーマやね」と言われた。母親の
言う通り、とても難しいテーマだ。ただでさえニュースを自分から
進んで見ない私が、そんなことを書けるのだろうか。

そんな不安を頭の隅に置いて、いつものようにアニメを見る。そ
の時、ハッとした。自分がいつも見ているのは探偵のアニメ。犯罪
とはいつも隣合せのアニメだ。もしかしたら、何かヒントがあるか
もしれない。

そういえば、さっきまですぐく親切だった人が犯人だと分かった
時、「いい人だと信じてたのに」とよく思う。主人公たちに優しく
していた人が犯人だと知ると、いつも衝撃を受けるのだ。あと、「犯
人も可哀想だな」と思うこともよくある。それはきつと、犯人が犯
罪を犯した理由が、それなりに説得力のある理由だから。犯罪を犯
すのは、許されないことだ。でも、例えば殺人事件で、「親を自殺
に追い込んだのが許せなかった」とか、「この人のあの言葉に傷つ
いた」とか言われてしまうと、何も言えなくなってしまうのである。
よくよく考えてみると、どんな人でも、いつ、どこで犯罪を犯し
てもおかしくないのかもしれない。本当は優しい人でも、どこかで
溜まった怒りや悲しみ、復讐心で、犯罪を犯そうという考えに至っ
てしまうことがあるのかもしれない。私が見たのはアニメで、現実
ではないが、現実でもきつと同じだと思う。

実際、何気なくみたニュースのある事件でも、その事件の容疑者

の近所の人が、「そんな人には見えなかった。よく挨拶してくれた」とインタビューに答えていた。

そういう感情を持っている人が、犯罪を犯すことから救うために
は、どうすれば良いのだろうか。やっぱり、まずは一人一人が自分を
大切にすることが一つの策だと思う。自分の中に、さつき書いた怒
りや悲しみ、復讐心だけでなく、ストレスや孤独なども溜まってし
まうと、つい悪いことをしてしまいたくなるのも分かる。だからこ
そ、それを抱え込まずに、誰かに相談することが大切だと思う。相
談することは少し照れ臭いかもしいない。でも、自分の心境を人に
話すことで、少しでも自分の心が軽くなると感じるのであれば、そ
れは話すべきだと思う。自分を大切にすることで、他の誰かを大切
にする余裕ができ、一人一人が大切にされる社会になっていくので
はないだろうか。

自分を大切に。一人一人が大切にされる。それを続けていく
ことで、誰もが幸せに生きていけるような、そんな社会にしてい
きたい。

そして、最後にもう一つ。作文を書く前、私は、ニュースを見て
いないと、更生や非行防止のことなんて考えられないと思ってい
た。でも、それは、違った。ニュースを見ていても、見ていなくても、
社会を明るくするために考えることは誰だってできるのだ。犯罪に
詳しい人も、あまり詳しくない人も、社会を明るくするためにど
うすればいいのかを考え、自分にできることから始めていく。そし
て、みんなで社会をよりよくしていく。そんな世の中になることを、
私は願っている。



京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

ちがいを認める大切さ

京都市立下京渉成小学校

六年

延澤のへろ

栄仁よしと

「何してんねん」と友人にげんこつをくらった瞬間、私の中で何がはじける音がした。

休み時間にドッチボールをしていた時「こっちだ」と言っている友人めがけてボールを投げた。しかし、ボールを思ったより遠くに行かずパスミスをしてしまった。けれどもミスはその一回だけで、それまではチームにこうけんしており、そしてこのパスミスも「しまった」と心の中で反省をしていた。

気づくとその友人をめぐって手をふりまわしていた。先生や友人が止めに入っているのにもかかわらず、私は自分のいかりを抑えきれず、友人との取っ組み合いが続いた。しばらくして、私たちは落ちつくように引きはなされたのだが、私は私なりの正義を全うしただけで私は悪くない。悪いのは、友人の方だ、と先生にその時の様子を説明していた。しかし、先生から私に投げかけられた「やられたら、やり返していいんですか」という言葉にハツとして、以前から教えてもらったおしゃか様の言葉を思い出した。それは「怒みに報いるに怒みを以ってしたならば、ついに怒みのやむことがない」である。人間は「自分の方が正しい」と思いこみ、なかなかゆずり合つことが出来ないため、その責任は、すべて他人にあるといつところに立ってしまいがちだ。そして、それが元で争いが起つたり、にくしみ、悲しみの連鎖につながるものが多くある。やられたらやり返すという形だけでは、解決方法が見つからない場合も多いのだらう。先生からの言葉をかみしめながら、そう考えてなぜかなみだが自然とあふれてきた。

今もなお世界ではたがいの国が「正義」を主張し戦争がなくなら

ないのは、自分だけが正しい、私こそが正義といったことにとらわれすぎているのが理由なのではないか。

私たちは、自分にとって都合のいい人を仲間として都合が悪くなると簡単に仲間外れをしてしまうことがある。けれども、本当の友だちや仲間は相手の立場にたって、間違いをきちんと指てきしてくれたり、一緒に本気で悩んでくれたりする人ではないだろうか。おたがいを大事に思つて、尊敬しあえる存在が本当の仲間なのではないか、と。自分の価値観だけじゃない。相手だってクラスみんなだって、自分なりの価値観と個性をかがやかせながら、おたがいに向き合おうとしているのだ。

違いを認め合つていけるような世界観を発見していくことこそが、社会を明るく、いきいきとしたものにしていくのではないかなと思う。生活環境も思つていることも多種多様で同じ人なんて一人もいないけど、みんな一緒だよと言える社会は本当にすてきなものだと思う。こう考え友人とは仲直りして、今では「本当の友達」だ。これからはクラスや学年そして学校全体までこの社会のよさまたは改善していくことについて話していきたいです。また、「やられたらやり返す」のではなく、おたがいの違いを認め合つと一人一人が呼びかけ合えるようにしたいです。

